

子ども期の家族との経験が高校生活・大学生活に与える影響：大学生アンケート調査分析から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜島, 幸司 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/183

子ども期の家族との経験が高校生活・大学生活に与える影響

—大学生アンケート調査分析から—

浜島 幸司

1. はじめに

本稿では、子ども期の経験が青年期にどのような側面で影響を与えているか、大学生調査データをもとに検討する。データ分析を経て、「子ども期→高校生活→大学生活」の関連性を考察する。

この分析枠組みを参照し、子ども期の経験を「家族との経験」と位置づけたうえで、浜島・武内（2015）では2013年に実施した1つの大学での調査データを分析し、報告している。そこでは下記の6つの知見を得ている。

①子どもの頃の家族との経験は「文化資本」として位置づけることができる。②子どもの頃の「文化資本」が高い大学生ほど、高校時代の活動割合が高い。③子どもの頃の「文化資本」が高い大学生は、日ごろの行動（マナーやルール）への順守や社会意識も高い。④高校時代の活動が、現在（大学時代）に接続している。⑤高校時代の活動がもつ直接的な効果も高い。⑥現在（大学時代）に対する、子どもの頃の「文化資本」の影響は、ボランティアや異性交際にみられる。

（浜島・武内、2015：50）

上記より「2010年代においても、子ども期の経験は、青年期に、直接的もしくは間接的な影響を与えている」（浜島・武内、2015：50）ことが示唆された。しかし、あくまでも1つの大学での分析結果にすぎない。そこで今回、2013年に複数大学に実施した調査データをもとに検討する。分析枠組みを踏襲し、所属大学が異なる大学生データからも同様の知見が得られるかどうか検証したい。

したがって、本稿の問題は浜島・武内（2015）同様、谷田川（2010）や武内（2014）の問題関心を引き継ぐものとなっている。谷田川（2010）は、子どもの頃の家族との経験を「文化資本」と捉え、その資本量と大学生の勉強文化の関連性について大学生調査データをもとに論じている。武内（2014）は、大学生文化にはそれ以前の高校時代、さらにそれ以前の子ども時代に経験した諸文化との接続が強いことを論じている。

大学生にとって、子ども期の家族との経験がその後の高校生文化および現在の大学生文化にどのような影響があるのか検証していきたい。最後に「子ども期→高校生活→大学生活」の関連性の有無を明らかにしたうえで、この接続が何を意味するのか考察する。

2. 分析枠組

分析枠組みは図1のとおりである。データ紹介は第3節で、分析は第4節でおこなう。

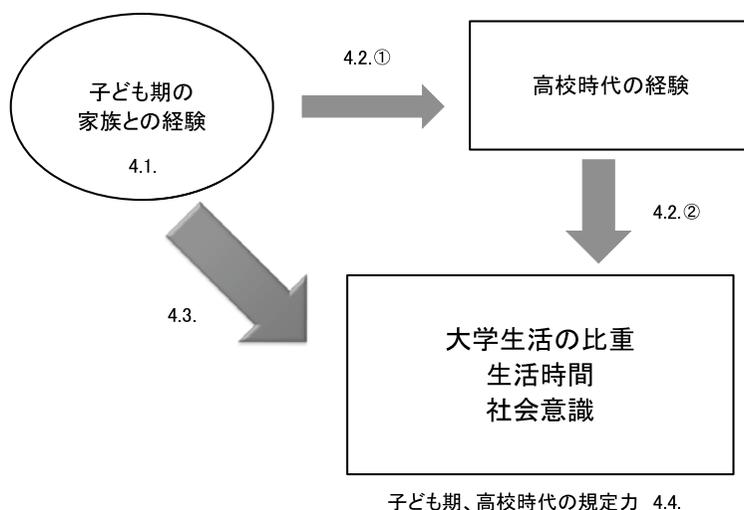


図1 分析の流れ

(浜島・武内、2015:46)を一部加筆

浜島・武内(2015)で展開した分析と同様に、子ども期の経験(4.1.)を確認したのち、高校時代との関連性(4.2.)、大学時代との関連性(4.3.)を個別に検討する。次いで、子ども期の経験の影響を知るために複数の独立変数を投入した重回帰分析をおこなう(4.4.)。子ども期の経験が独立して高校生活、大学生活にどのような影響を与えるのか明らかにする。

3. 使用するデータ

使用する調査データは、「大学生文化研究会」(代表:武内清)が実施した大学生生活実態調査に回答した1771名である。すでに調査報告書が刊行されている(武内(研究代表)、2015)。現時点において直近の大学生の意識と実態を把握できる貴重なデータとして再分析する。

調査大学、対象、時期、方法は下記のとおりである。

調査大学:14大学(国立4校、私立大学10校)

調査対象:人文・教育・社会科学系学部に所属する大学生

調査時期:2013年9月~12月

調査方法:授業時に学生に記入してもらう自記形式(一部持ち帰り方式)

表1が分析サンプルの男女別学年の割合である。無回答は分析から除外しているため総数が1771名とはなっていない。本サンプルの特徴として、①全学年から回答を得ているが1年生および2年生のサンプルが多くを占める、②女子学生が男子学生よりも多い、ことに触れておきたい。これは浜島・武内(2015)で分析した1つの大学サンプルとは傾向が異なっている¹⁾。

表1 性別×学年 (分析サンプル)

	学年				全体
	1年	2年	3年	4年	
男	226 33.8%	263 39.4%	106 15.9%	73 10.9%	668 100.0%
女	351 32.1%	424 38.8%	216 19.8%	101 9.2%	1092 100.0%
全体	577 32.8%	687 39.0%	322 18.3%	174 9.9%	1760 100.0%

4. 分析結果

4.1. 子どもの頃の家族との経験

子ども期の経験については、以下の質問を使用した。子どもの頃の家族との経験（質問文は「あなたの子どものころ（小学校時代）のことをお聞きします。家族との関係で、次のようなことがよくありましたか」）として5項目用意した。全体の回答結果は図2である。5項目の信頼性係数（クロンバックの α ）は0.727であり、これは浜島・武内(2015)で分析したときと同様に、家庭での「文化資本」をあらわしているものといえよう。

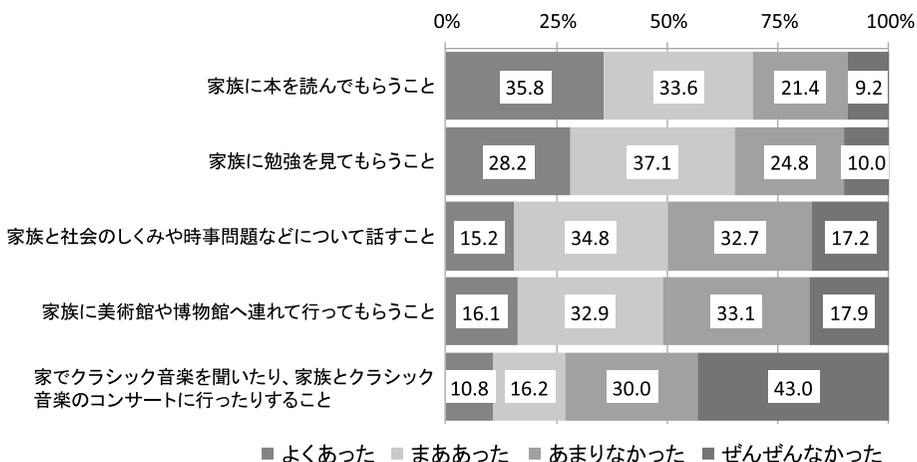


図2 家族との経験 5項目の単純集計

本項目を「家族との経験」として合成尺度を作成した。5項目の回答を得点として足し上げ、「あった」経験を数値化した。「低 (5-10点)」、「中 (11-14点)」、「高 (15-20点)」の3グループに分けた²⁾。なお、表2のように性別でグループの構成割合をみると、男子学生に「低」が多く、女子学生に「高」が多いという結果になる(カイ二乗検定で有意差あり)。女子学生のほうが、男子学生よりも、家庭での「文化資本」が高かったということになる³⁾。この結果も浜島・武内(2015)での分析と同様の傾向を示している。

表2 性別×家族との経験

	「家族との経験」得点			全体
	低 (5-10点)	中 (11-14点)	高 (15-20点)	
男	216 32.4%	304 45.6%	146 21.9%	666 100.0%
女	223 20.4%	490 44.9%	379 34.7%	1092 100.0%
全体	439 25.0%	794 45.2%	525 29.9%	1758 100.0%

p<0.01

4.2. 高校時代における家族との経験

高校時代の活動(7項目)でそれぞれ家族との経験グループによる回答を分析した(表3)。「異性につきあった」を除いた6項目で有意な結果となった。

表3 家族との経験×高校生活

「した」%	全体	「家族との経験」3グループ			カイ二乗検定
		低 (5-10点)	中 (11-14点)	高 (15-20点)	
部活動をした	75.0%	70.2%	77.0%	76.0%	p<0.05
受験勉強をした	74.9%	68.9%	75.4%	79.0%	p<0.01
髪形や服装に気がつかった	58.6%	53.5%	62.1%	57.6%	p<0.05
異性につきあった	41.3%	43.7%	40.3%	40.8%	n.s
本をたくさん読んだ	39.3%	30.5%	36.9%	50.2%	p<0.01
ボランティア活動をした	19.7%	11.6%	17.1%	30.3%	p<0.01
アルバイトをした	16.6%	19.4%	17.3%	13.2%	p<0.05

有意差のある項目に注目すると、「中」および「高」グループの高校時代の活動割合が高いことがわかる。ただし、「アルバイト」は「中」および「低」グループの活動割合が高い。「中」とりわけ「高」グループは、高校時代に、「部活動」、「受験勉強」、「おしゃれ(髪形や服装に気がつかった)」、「勉強(本をたくさん読んだ)」、「ボランティア活動」を、「低」に比べて、多く経験している。

武内（2014）だけでなく、すでに岩田（1999）が指摘している高校時代の活動と大学時代の連続性についても分析した。表4のように、本データにおいても、浜島・武内（2015）の分析結果と同様に連続性が強いことも明らかになった。

表4 高校時代×大学時代

高校時代		大学生活（現在）			カイ二乗 検定
		学業、勉強			
高校時代		高い	低い	全体（100.0%）	p<0.01
受験勉強	した	60.8%	39.2%	1320	
	しなかった	50.2%	49.8%	446	
	全体	58.2%	41.8%	1766	

高校時代		大学生活（現在）			カイ二乗 検定
		サークル、部活動			
高校時代		高い	低い	全体（100.0%）	p<0.01
部活動	した	47.5%	52.5%	1318	
	しなかった	36.5%	63.5%	441	
	全体	44.7%	55.3%	1759	

高校時代		大学生活（現在）			カイ二乗 検定
		アルバイト			
高校時代		高い	低い	全体（100.0%）	p<0.01
アルバイト	した	66.7%	33.3%	294	
	しなかった	46.1%	53.9%	1466	
	全体	49.5%	50.5%	1760	

高校時代		大学生活（現在）			カイ二乗 検定
		異性（恋人）との交際			
高校時代		高い	低い	全体（100.0%）	p<0.01
異性とつきあった	した	37.3%	62.7%	727	
	しなかった	16.7%	83.3%	1028	
	全体	25.2%	74.8%	1755	

高校時代		大学生活（現在）			カイ二乗 検定
		ボランティア活動をしている			
高校時代		そう	そうでない	全体（100.0%）	p<0.01
ボランティア活動	した	59.0%	41.0%	346	
	しなかった	20.0%	80.0%	1420	
	全体	27.6%	72.4%	1766	

4.3. 大学生生活における家族との経験

大学時代の活動（8項目）でそれぞれ家族との経験グループによる回答を分析した（表5）。有意差がみられる3項目と、みられない5項目がある。浜島・武内（2015）では「学業、勉強」では差異はみられなかったが、本分析においては有意な差があった。つまり、「高」グループは、「友人との交友」、「学業、勉強」を「低」に比べて比重を大きく置いていることがわかる。一方、「アルバイト」比重は、「低」グループが「高」に比べて大きく置いている。

他にも、浜島・武内（2015）で見られた「異性（恋人）との交際」、「就職活動」への比重に対する、家族との経験グループによる差異は本サンプルではみられない。

表5 家族との経験×大学生生活の比重

「高い」%	全体	「家族との経験」3グループ			カイ二乗検定
		低(5-10点)	中(11-14点)	高(15-20点)	
友人との交友	67.4%	60.7%	68.9%	70.6%	p<0.01
学業、勉強	58.2%	52.2%	58.6%	62.6%	p<0.01
アルバイト	49.5%	52.1%	51.8%	43.8%	p<0.01
趣味	49.3%	47.8%	49.9%	49.8%	n.s
サークル、部活動	44.9%	42.1%	44.3%	48.0%	n.s
異性（恋人）との交際	25.3%	23.7%	27.0%	24.2%	n.s
就職活動	11.7%	8.7%	12.9%	12.2%	n.s
ダブルスクール	2.2%	0.9%	2.5%	2.7%	n.s

次に、現在の生活・意識項目について分析した結果である（表6）。有意差のある項目を掲載した。「自分の将来に関して、不安を感じる」を除いて、「高」グループの回答が、「低」に比べて高い。とりわけ社会意識に関する項目では家族との経験による差異がみられている。具体的には、「選挙で投票に行く」では、「高」80.7% > 「中」71.0% > 「低」56.9%、「自分のためより社会のために働きたい」では、「高」50.7% > 「中」43.3% > 「低」33.7%、「労働についての法律や労働者の権利について知っている」では、「高」43.8% > 「中」34.5% > 「低」30.5%となっている。

浜島・武内（2015）での分析に比べ、社会意識について、家族との経験による差異が顕著であった。サンプルの違い（1つの大学と複数の大学）による影響があったものと考えられる。

さらに、生活時間（4項目）の平均時間⁴⁾をグループ別に算出し、平均の差の検定を実施した（表7）。有意差のある項目は、「本を読む（読書）」と「授業の予習・復習」であった。「高」グループの読書（「高」41.9分 > 「低」29.8分 > 「中」27.9分）と学修時間（「高」33.0分 > 「中」26.0分 > 「低」21.4分）が長いことがわかる。

しかし、「スマートフォン・携帯電話」と「アルバイト」の時間についてはグループによる有意差はみられない。傾向としては、「高」グループの「スマートフォン・携帯電話」

〔高〕145.9 分<〔中〕151.7 分<〔低〕155.8 分) と「アルバイト」(〔高〕143.8 分<〔中〕151.5 分<〔低〕156.9 分) と短くなっている。

表 6 家族との経験×現在の生活・意識

	全体	家族との経験			カイ二乗 検定
		低 (5-10 点)	中 (11-14 点)	高 (15-20 点)	
自分の将来に関して、不安を感じる	82.0%	82.9%	83.9%	78.5%	p<0.05
お年寄りや体の不自由な人に席を譲る	81.6%	72.9%	81.7%	88.8%	p<0.01
毎日が充実している	74.6%	64.2%	74.4%	83.4%	p<0.01
選挙で投票に行く (選挙権のない人はあると仮定して)	70.4%	56.9%	71.0%	80.7%	p<0.01
音楽は自分の生活の一部だ	65.6%	58.2%	65.6%	71.9%	p<0.01
休日や長期休みに旅行をする	54.0%	41.2%	54.5%	64.0%	p<0.01
映画を観に行く	50.9%	41.6%	50.8%	58.8%	p<0.01
カラオケに行く	50.7%	45.8%	51.3%	53.9%	p<0.05
ファッションについての情報をチェックしている	45.7%	36.0%	46.5%	52.4%	p<0.01
自分のためより社会のために働きたい	43.1%	33.7%	43.4%	50.7%	p<0.01
料理をよくする	40.5%	37.8%	36.6%	48.8%	p<0.01
労働についての法律や労働者の権利について知っている	36.3%	30.5%	34.5%	43.8%	p<0.01
新聞をよく読む	16.9%	12.8%	14.8%	23.6%	p<0.01
占いをチェックしている	13.3%	8.0%	14.0%	16.6%	p<0.01

「そう」%

表 7 家族との経験×生活時間 (平均)

		全体	家族との経験			平均の差の 検定
			低 (5-10 点)	中 (11-14 点)	高 (15-20 点)	
スマートフォン・携帯電話	平均値(分)	151.0	155.8	151.7	145.9	n.s
	標準偏差	76.9	76.7	75.8	78.7	
アルバイトをする	平均値(分)	150.6	156.9	151.5	143.8	n.s
	標準偏差	100.6	100.1	100.4	101.1	
本を読む (読書)	平均値(分)	32.5	29.8	27.9	41.9	p<0.01
	標準偏差	47.6	48.1	40.8	54.9	
授業の予習・復習	平均値(分)	26.9	21.4	26.0	33.0	p<0.01
	標準偏差	41.3	36.5	39.1	47.1	

4.4. 大学生活における家族、高校時代の影響

浜島・武内 (2015) と同様に、大学生の子どもの頃の家族との経験を「高」、「中」、「低」の3グループに分け、高校時代の経験、現在の大学生生活の意識と実態の差異を分析してきた。本サンプルにおいても、「高」グループほど、高校時代の経験が高く、さらに現在の大学生生活の意識の高さがみられている。

とはいえ、クロス分析だけでは家族との経験がそれぞれの時代の活動に与える独立した効果はわからない。独立した効果を探るためにも、他にもそれぞれの時代に活動を与える可能性のある変数を統制しておく必要がある。そこで浜島・武内（2015）でも用意した以下の2つのモデルを用意し、重回帰分析をおこなう。この結果から、家族との経験に注目した形で、独立変数の単独の効果（有意の有無と規定力）を確認していきたい。

モデル①：（独立変数）性 + 家族との経験 + 高校ランク → （従属変数）高校時代の経験

独立変数の性別はダミー変数（男子学生 = 1、女子学生 = 0）、家族との経験は5項目を足しあげた得点を使用した。高校ランクは出身高校の進学状況についての回答を使用（「難関大学進学が多い」 = 4 「ふつうの大学が多い」 = 3 「短大・専門学校が多い」 = 2 「就職・その他が多い」 = 1）した⁵⁾。

従属変数は「高校時代」の各活動の回答を使用（「かなりした」 = 4 「まあした」 = 3 「あまりしなかった」 = 2 「ほとんどしなかった」 = 1）した。

モデル②：（独立変数）① + 高校時代 + 学年 → （従属変数）大学時代の比重

従属変数は「大学時代」の各活動の回答を使用（「大部分」 = 4 「かなり」 = 3 「少し」 = 2 「ほとんどなし」 = 1）した。

追加した独立変数の学年は現在の回答者のものを使用（「1年生」 = 1、「2年生」 = 2、「3年生」 = 3、「4年生」 = 4、「その他」は分析から除外）した。

今回取り上げた「高校時代」、「大学時代」の活動は、「受験勉強、勉強比重」、「部活動、部・サークル活動」、「アルバイト」、「異性とのつきあい、交際」、「ボランティア活動」の5つとした。表8から表12が2つのモデル（①高校時代と②大学時代）に対する重回帰分析の結果である。

表8 受験勉強、勉強比重を規定する要因

↓独立変数	従属変数→	①高校時代	②大学時代（現在）
		受験勉強	学業、勉強
		β	β
(定数)		**	**
性 (男 = 1)		-.054 *	-.045
家族との経験		.108 **	.102 **
出身高校 (高校ランク)		.165 **	-.027
(高校時代) 受験勉強			.101 **
学年			.005
F 値		27.931 **	9.359 **
調整済み R2 乗		.045	.024
N		1717	1705

* p<0.05 ** p<0.01

表8より、①受験勉強は出身高校、家族との経験、女子学生であることが有意である。②学業、勉強は家族との経験、高校時代の受験勉強が有意である。浜島・武内(2015)の結果とは異なり、家族との経験が高校・大学時代に直接の効果をもつことが確認された。

表9 部活動、部・サークル活動を規定する要因

↓独立変数	従属変数→	①高校時代	②大学時代(現在)
		部活動	サークル、部活動
		β	β
(定数)		**	**
性(男=1)		.095 **	.129 **
家族との経験		.063 *	.030
出身高校(高校ランク)		.098 **	.067 **
(高校時代)部活動			.119 **
学年			-.133 **
	F値	12.796 **	20.909 **
	調整済みR2乗	.020	.055
	N	1718	1699

* p<0.05 ** p<0.01

表9より、①部活動は出身高校、男子学生、家族との経験が有意である。②サークル・部活動は、低学年であること、男子学生、高校時代の部活動、出身高校が有意である。家族との経験は高校では直接の効果をもっていたことがわかる。

表10 アルバイトを規定する要因

↓独立変数	従属変数→	①高校時代	②大学時代(現在)
		アルバイト	アルバイト
		β	β
(定数)		**	**
性(男=1)		-.060 *	-.043
家族との経験		-.074 **	-.053 *
出身高校(高校ランク)		-.176 **	.019
(高校時代)アルバイト			.172 **
学年			.135 **
	F値	24.317 **	19.798 **
	調整済みR2乗	.039	.052
	N	1717	1700

* p<0.05 ** p<0.01

表10より、①高校でのアルバイトは出身高校(マイナス)、家族との経験(マイナス)、女子学生が有意である。マイナスの効果があるということは、出身高校は高校ランクの低い学校、家族との経験は合計得点が低いほどアルバイトをしたということになる。②大学でのアルバイトは高校時代のアルバイト経験、学年、家族との経験(マイナス)が有意である。高校・大学時代に家族との経験、言い換えれば「文化資本」の少ないことがアルバイトへ直接の効果をもっている。

表 11 より、①高校時代の異性とのつきあいに有意な項目はない。これは浜島・武内 (2015) の分析結果と同様である。②大学時代の異性交際比重では、高校時代の異性とのつきあいと家族との経験、学年が有意である。家族との経験は高校時代には有意ではないものの、大学時代になると異性との交際に対し、直接の効果をもっている。

表 11 異性との付き合い、交際を規定する要因

↓独立変数	従属変数→	①高校時代	②大学時代 (現在)
		異性につきあった	異性恋人との交際
		β	β
(定数)		**	**
性 (男=1)		.032	-.003
家族との経験		-.005	.050 *
出身高校 (高校ランク)		-.009	.009
(高校時代) 異性につきあった			.333 **
学年			.047 *
F 値		.684	44.291 **
調整済み R2 乗		-.001	.113
N		1718	1695

* p<0.05 ** p<0.01

表 12 より、①高校時代のボランティア活動は家族との経験、女子学生、出身高校 (マイナス) が有意である。②大学時代のボランティア活動は、高校時代のボランティア活動、学年、家族との経験、女子学生が有意である。家族との経験が高校・大学時代に直接の効果をもつことが確認された。

表 12 ボランティア活動を規定する要因

↓独立変数	従属変数→	①高校時代	②大学時代 (現在)
		ボランティア活動	ボランティア活動
		β	β
(定数)		**	**
性 (男=1)		-.087 **	-.053 *
家族との経験		.224 **	.055 *
出身高校 (高校ランク)		-.059 *	.017
(高校時代) ボランティア活動			.441 **
学年			.118 **
F 値		39.944 **	101.126 **
調整済み R2 乗		.064	.227
N		1718	1705

* p<0.05 ** p<0.01

以上の重回帰分析の結果より、家族との経験が①高校時代の活動に対し、直接的に有意な効果をもつ項目は、「受験勉強」、「部活動」、「アルバイト (マイナス)」、「ボランティア活動」である。同様に、②大学時代の比重に対し、直接的に有意な効果をもつ項目は「学業、勉強」、「アルバイト (マイナス)」、「異性恋人との交際」、「ボランティア活動」である。

大学生たちの子どもの頃の家族との経験は、谷田川（2010）が論じた勉強文化との関連性以外にも他の項目においても影響力をもっていることがわかった。特筆すべきは、勉強やボランティア活動は家族との経験とプラスの関係（家族との経験が多いと勉強比重が高まる）にあるが、アルバイトについてはマイナスの関係にあることだ。家族との経験が多いと高校時代にアルバイトをしなかった。さらに、大学時代のアルバイト比重が低くなる。反対に、家族との経験が少ないと高校時代にアルバイトをおこなった。さらに、大学時代のアルバイト比重が高くなる。このように、子どもの頃の「文化資本」は生徒・学生時代の労働と相反する。子どもの頃の「文化資本」は学校との接続に影響を与えていることがわかる⁶⁾。

また、浜島・武内（2015）と同様の結果となったが、5つの活動すべてにおいて、②大学時代に対し、①高校時代のもつ効果が有意であり、かつ規定力も強いことがわかった。武内（2014）が示すように、大学時代の活動の背後には高校時代での経験が大きい。

5. まとめと考察：「子ども期→高校生活→大学生活」が意味するもの

2013年に実施した14大学の学生データを再分析したところ、子ども期の経験は高校時代、大学時代と青年期に対し、直接的な影響を与えていることがわかった。また、子ども期の経験は大学時代に直接的な影響を与えられていなくとも、高校時代に直接的な効果を与えており、間接的な影響も与えていることがわかった。

この結果は浜島・武内（2015）でみられたものと概ね同様である。もちろん、分析データのサンプルが異なるため、細かくみれば差異が生じている。しかしながら、同じ分析枠組みで、同時期に大学生を対象に調査したデータを分析したところ、同様の傾向が提示された。この知見が意味するものは大きい。

それは「文化階層再生産」の議論が今もなお通用することが示されたからである。親の子どもへの関わりが、子どもには「文化資本」として蓄積され（Bourdieu et Passeron, 1964=1997）、彼らの高校生文化、大学生文化形成に援用される。学校生活は子ども自身が送るものであるが家庭で身につけた習慣（ハビトゥス）によって学校生活への適応、生き残りが左右されている。本サンプルの大学生たちが子ども期を過ごした1990年代後半から2000年代前半においても、一部の親たちは子どもたちのことを考え、関わっていたのである。

子どもたちは成長し、新しい環境への適応を繰り返す。大学生の立場であれば、直近の高校時代、もう一つ前の中学時代の経験が大きいはずだ。それにもかかわらず、子ども期の家族との経験が影響している。とりわけ勉強、ボランティア、異性交際の面で、家庭から受けた恩恵は大きい（図3）。むしろ、大学生になって急に新しいことに取り組むのは難しいのではないか。彼らの入学までの足取りを踏まえたうえで学生生活を捉える必要があるだろう。

以上、2つのデータ分析から、2010年代前半においても、子ども期の経験は、青年期に直接的もしくは間接的な影響を与えている。子ども期の経験が将来に与える意味について、より多角的な視点を交えて、引き続き検討していきたい。

子どもの頃の経験はその後の生活にどう関わっていくのか？

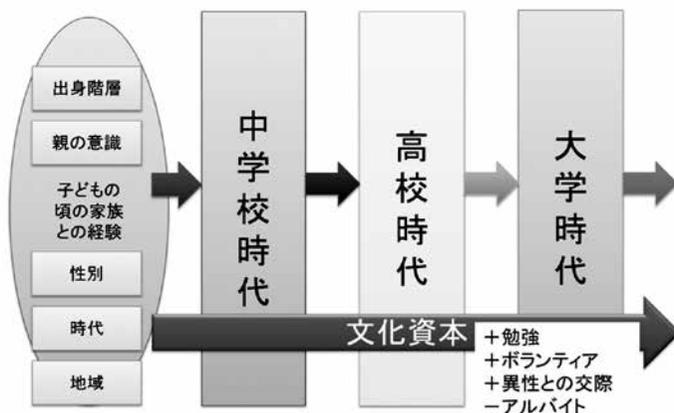


図3 子ども期の家族との経験が与える意味

注

- 1) 浜島・武内（2015）で分析したデータは694名である。そのサンプルの特徴としては「①1年から4年生までのサンプルが一定程度あること、②男子学生が女子学生よりも多いこと」（浜島・武内、2015：43）であった。
- 2) 浜島・武内（2015）での3グループの基準は、「低（5-9点）」、「中（10-13点）」、「高（14-20点）」としていた。688名を100%として、「低（5-9点）」が28.6%、「中（10-13点）」が43.0%、「高（14-20点）」が28.3%となっている（浜島・武内、2015：44）。しかし、本サンプルで同様に区分すると、「高」グループの比率が大幅に高くなってしまいうため基準を変更することにした。本サンプルのほうが、全体的に家族との経験を多く回答している。
- 3) 大学別回答サンプルの男女比と、「家族との経験」得点の平均を下記に示す（表13）。大学差も大きい、すべての大学において、女子学生>男子学生の得点差がみられる。

表13 大学別男女割合と「家族との経験」得点平均

大学	性別		全体 (100.0%)	「家族との経験」得点 (平均)		
	男	女		男	女	全体
A	73.2%	26.8%	127	12.81	13.41	12.97
C	32.1%	67.9%	187	11.72	13.47	12.91
D	38.6%	61.4%	114	12.07	13.76	13.12
F	30.1%	69.9%	173	12.96	14.17	13.80
G	50.2%	49.8%	219	11.43	12.49	11.95
H	47.9%	52.1%	188	11.99	13.56	12.82
J	29.5%	70.5%	95	11.43	11.84	11.72
L	45.6%	54.4%	149	12.71	12.59	12.64
W	7.8%	92.2%	102	12.50	12.53	12.53
Z	-	100.0%	89	-	14.40	14.40
イ	50.4%	49.6%	133	10.32	11.94	11.16
ロ	-	100.0%	84	-	12.87	12.87
ニ	50.7%	49.3%	67	12.26	12.82	12.54
ホ	47.6%	52.4%	42	11.75	13.36	12.60
全体	38.1%	61.9%	1769	11.97	13.14	12.70

- 4) 回答選択肢をそれぞれ次のように数値に置き換えた。「ほとんどしない」=0、「30分くらい」=30、「1時間くらい」=60、「2時間くらい」=120、「3時間くらい」=180、「3時間以上」=240。なお、無回答は分析から除外している。
- 5) 家族との経験と出身高校の関係をみると、「高」グループに「国公立や難関大学進学が多い」、「低」グループに「ふつうの大学が多い」、「短大・専門学校等が多い」の割合が大きい(図4)。

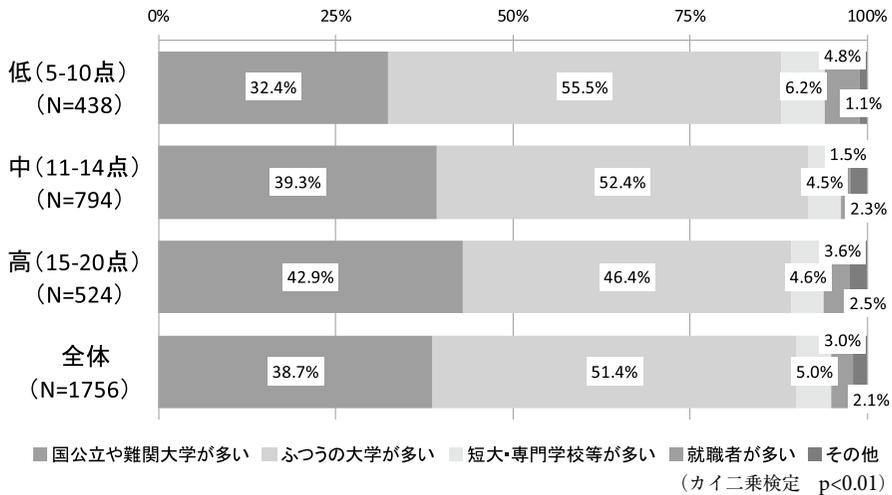


図4 家族との経験×出身高校

- 6) もちろん、家庭の事情で、高校時代、大学時代に働かなければ、学業との両立が果たせないような経済状況に陥ることもある。経済状況が理由で進学をあきらめたり、休学・退学せざるを得なかったりする状況をなくすためにも、学費の軽減措置、奨学金の充実といった支援策が求められる。

参考文献

- Bourdieu, Pierre et Passeron, Jean-Claude, 1964, *Les héritiers: Les étudiants et la culture*. (= 戸田清・高塚浩由樹・小澤浩明訳, 1997, 『遺産相続者たち—学生と文化—』, 藤原書店.)
- 浜島幸司・武内清, 2015, 「敬愛大生の子ども期の経験が青年期に与える影響」敬愛大学・研究プロジェクト編『敬愛大生のキャンパスライフ(その2)』, pp.46-55.
- 岩田弘三, 1999, 「学生文化形成についての大学間比較に関する研究」神戸大学 大学教育研究センター『大学教育研究』, 第7号, pp.1-19.
- 武内清, 2014, 『学生文化・生徒文化の社会学』, ハーベスト社.
- 武内清(研究代表), 2015, 『現代の学生文化と学生支援に関する実証的研究—学生の「生徒化」に注目して—』, 平成24~26年度科学研究費研究補助金(基盤研究(C))研究成果最終報告書.
- 谷田川ルミ, 2010, 「子ども時代の経験が後年に及ぼす影響—大学生から見る勉学文化の連続性に注目して—」『子ども社会研究』, 16号, pp.45-58.

【付記】 本稿は、2015年6月27日に開催された日本子ども社会学会第22回学会大会(愛知教育大学)での同名(報告者は浜島幸司・武内清・谷田川ルミの連名、登壇者は浜島のみ)の自由報告をもとに、加筆したものである。